

俞子夷の教育実践と新教育運動

小林善文

はじめに

俞子夷（一八八六一—一九七〇）は、江蘇省呉県出身で、二〇世紀前半の中国教育界において新教育導入の先駆となり、その試行の中心的存在として活躍した教育家である。中国近現代の小学校における教学方法の変化と発展の歴史を見ると、五段教授法・単級教授法・分団教授法・自学輔導法・設計教学法・ドルトン制などの新たな教育理論の導入と実践、さらにはその普及において、ほとんどすべてのものが俞子夷に関係するといわれている。¹ かれの最高学歴は、六年制中学に相当する南洋公学中院で、正規の留学歴もなく、自らの営々たる努力によって教育家としての実績を積み上げた人物である。小学校を中心とした教育現場に主たる拠点を持ったかれは、日々直面する諸々の課題に真摯に向き合い、新たな教育理論を導入することによって教育効果を上げようと努力した。

俞子夷の実践の跡を追うことは、中国近代教育史における新教育導入の過程を追い、その成果を検証し、さらには影響を明らかにする上で大きな意味を持つと考えられる。とくに俞は、算術教授法の研究と実践において第一人者として知られていたが、その算術教授法を含む教育実践の全体像と教育思想に重きを置く分析を進めることによって、かれの中国近代教育史における評価を試みたい。なお俞は、『教育雑誌』に二〇本を超える文章を書き、『教育雑誌』自体が二〇世紀前半の中国教育界の歴史を追う上で最良の素材と考えられるので、この雑誌を軸に新教育運動をめぐる分析をおこなう。

一、五四時期以前の教育方法の導入と展開

一九〇三年、俞子夷は愛国学社で蔡元培らに学んでいたが、『蘇報』案が起こり、日本に逃れた。その際、かれは日本の書店で初等数学の参考書を購入して大切にしたが、とくに日本語の幾何学の教科書を読んで、かつて『幾何原本』を読んだときに感じた不明の点はすべて解決したと回想している。なおこのときかれは、横浜の中華学堂で珠算を教えて生計を立てている。翌〇四年に帰国し、蔡元培の組織した光復会に加入した。一九〇五年には安徽公学で化学を教え、翌〇六年には広明学堂（後の浦東中学）の師範生を相手に算術・小学理科・中学の動物・植物を教えた。一九〇八年には上海の単級規模の青墩小学で教えるなど主として理数系の科目指導を担当している。

こうした多様な教育経験が評価され、一九〇九年に江蘇省教育会は、楊保恒・周維城・俞子夷の三人を日本に派遣して「単級教法」（複式教法）を調査させた。このとき俞子夷は、算術と理科の教法にとくに注目している。その際、日本から教材を持ち帰っており、かれは「分教部分は、教材が簡易であり、加減法と通分は観察法を用い、効果はさらに顕著であった。……むろん数学や教法は、日本のものはすべて良いと考え、それらを模倣し、それらを崇拜させた⁵⁾」と述べている。これは兪の算術教授法への大きな関心からきた見解であるが、理想とする授業を進めるには、当時の中国における学校教育の環境はあまりにも悪かった。

清末の一九一一年三月二四日、学部は各省の初級師範学堂に単級教授法を採用するように通達しているが、そこでは「窮僻である地方の初級小学は、人数が多くなり、年級が各々異なるのに、編制はおおむね単級教授を用いているので、単級教授法に熟達した教員でなければ任に耐えられない。小学教員はおおむね単級教授を重んじているので、初級師範課程は単級教授法を増やし、学生が卒業後に応用する助けとするべきである⁶⁾」と採用の理由を述べている。このような悪条件の教育環境の中で、いかに教育指導の実際効果を上げるかが、日本視察の主なねらいであったと考えられる。俞子夷らは、東京高等師範学校附属小学の単級を主要な対象として、開学の日から連続して四〜五週間

參觀し、引き続きいて他の学校も調査し、三カ月後に帰国した。⁷

当時の日本では、ヘルバルト学派の方法論が流行しており、兪子夷自身も「単級はただ編制方式で、教法の實質はなお日本で通行していたかのいわゆるヘルバルト五段法である」と回想している。⁸ 民国期に入った一九一三年においても、鄭朝熙は「わが国は改革より以来、民窮し財乏しく、教師も欠乏し、教育普及を望めば単級編制以外には善法はない。……一人の教師が同時に教授することになるが、それは経費を節約するためであり、学級の人数の多さを顧みず、教員の精力を普通の人として顧みれば、教員一人に学生六七十人を超えることは望ましくない」と述べており、教育経費、教員数ともに欠乏している清末民国初期の段階で、教育普及を図ろうとすれば、単級教授法を採用せざるを得ない状態が続いていたことがわかる。

一九一二年一月、中華民国南京臨時政府が誕生し、蔡元培が教育総長に就任した。同年一月一九日、教育部が業務を開始し、「普通教育暫行辦法」と「暫行課程標準」を公布したが、準備不足もあつて抜本的な改革ができず、基本的に「奏定学堂章程」以来の日本の教育制度の影響を払拭できなかった。⁹ 教育方法に関しても日本の影響が大きく、日本から単級教授法とともに五段教授法が導入され、普及していった。その基礎となったヘルバルト教育学は、日本化されたヘルバルト教育学と称してもよかつたが、一方で中国の国情に結びつけた教育理論にしたいとの思いも生まれはじめていた。¹⁰

清末民国初期の中国教育界では、五段教授法はプロセスを重んじ、実用性と操作性に優れ、経験に乏しい教師でも順序を追つて教案を作り授業を進めることができた、と評価されている。¹¹ 兪子夷は、こうした五段教授法の活用は問題解決の教学という面で、効果を上げられることを論証するとともに、それが形骸化することを警戒した。「五段法は、伝わってきた後、ついに四十五分か三十分の作業で完全に五つの段階を経ることができるようになるものに変つてきたが、試みに創始した人の本意を問えば、このようなものではない」というかれの言葉は、五段教授法は教育手段として系統的で充実した内容を持つべきである、との思いを表したものであろう。¹²

俞子夷は、私塾の教学を含む伝統的な教育に対して終始温和な姿勢で臨み、「穩健派」を自認していたが、一方で現状認識は確かなものであった。かれは「私塾には公の補助がなく、地方の公款もなく、すべて家庭の出費によって維持されている」が、小学校は若干の公費に頼っているので私塾より学費が安いけれども「郷民はむしろお金を多く使っても子女を私塾に送る」といい「かれらの心理にも充分な理由がある」という。俞がこのように考えた背景には、新式の小学校の欠陥があった。教育普及に関して「各県はただ小学を増やす報告を求め、半私塾半小学の商標を盗用して数にあてている。結果として、経費は非常に少なく、教員は非常に悪く、そのため人々の信を得られない仮小学が非常に多い¹⁸⁾」という現状があった。私塾の多くは基本的に規模は小さく、単級教法が適用される規模であったと思われるが、発足当初の新式小学校の多くも規模としては単級教法が適用される規模であったと考えられる。かれは「新式学校は主に日本に倣って、初期には注入に偏り、後には次第に改進して、啓発を重んじ、自学を重んじたが、なお五段法の大枠の中にあつた²⁰⁾」と回想する。このように民国初期には、中国でもヘルバルト学派の教育論が依然として主流であった。

一九一四年に俞子夷は「画一制なるものは、亡国滅種の教育である²¹⁾」と述べている。さらに「学校の中心となる児童は、現在の児童であり、将来の成人である。……要するに、児童は学校において、陶冶される者ではなく、指揮される者でもなく、盲従する者でもなくして、まさに自己発達する者である」といい、知識の習得に関しても「児童の求知心を引き起こし、児童が自ら判断推考すること²²⁾」が大切であると述べている。当時、『教育雑誌』で論陣を張っていた天民の「児童の能力に各々差がある中で、同一の方法で全体の児童を理解させる授業法はない」という現状を打破するには、「分団組織の学級教授をおこなう以外に、とくに良法はない²³⁾」とする主張は、教育現場の実情を踏まえたものであった。さらにかれは「分団教授というものは、単式学級において複式教授をおこなうことではない²⁴⁾」とし、「一組は直接教授し、その他は間接教授して、努めて児童が自ら動き、もつてその自学自習の精神を養成することがそれぞれである」と述べている。また楊祥麀は、算術科の指導方法に関して「児童の自発自動の活力を養成し、自ら研め求め

させるといふ自学輔導主義の教授のみ」が重要であると主張している。⁽²⁵⁾

これより先の一九一三年、江蘇都督府教育司は俞子夷をアメリカに派遣した。かれは留学中の郭秉文・陳容と共に六カ月にわたつてアメリカ教育を視察した後、翌一四年にはヨーロッパに渡り、ロンドンとその近郊で教育調査に携わつた。⁽²⁶⁾ 天民の説く分団教授法も楊祥磨の自学輔導主義も、基本的な方向性は俞子夷の教育思想と共通する。それは実際に俞子夷らがアメリカやヨーロッパでの教育調査で得た教育方法でもあり、それまでの伝統的教學が教師の講授を重視し、児童や学生の主導的な学習を軽視してきた弊害に対する一種の批判であり、改革であつて、急速に中國教育界に広がつていつた。⁽²⁷⁾ 五段教授法に関しても、次第に機械的で融通が利かず生氣に乏しいと受け止められるようになってきていた。⁽²⁸⁾

単級教授という制約の中で、能力差のある児童に如何に授業を展開し、教育効果を生み出せるか。算術教授においては、とくにその方法論が大きな意味を持つことになる。俞子夷は、算術教授について科学的な研究と分析をおこなふことの意義を説く。⁽²⁹⁾ かれはアメリカのニューヨークにおける算術教授を紹介して、短時間の練習による成績は長時間の練習に勝ると述べる。⁽³⁰⁾ さらに教育現場での経験とアメリカでの視察を踏まえて、算術教授に関して大胆な提言をした。

俞子夷は「教育に従事する者は、効果と方法の適応を明らかにしなければ、教育上の消耗（時間の浪費、精神の消耗）は必ず大きなものとなる。日常の教授は、まさに用いるところの方法と費やす時間・精神の一つ一つを得る効果とをあい比較すべきで、これを教授の經濟觀という」⁽³¹⁾と述べ「教授の經濟觀」という新たな観点を提示したのである。そして、「經濟面での算術教授の革新を謀るならば、まさにまず教材の節減を求めべきである」と述べ、利息計算を元の小数点以下六〜七位までおこない、車輪の周りを寸の小数点以下四〜五位まで計算させているのは「無益の計算」として排斥する。⁽³²⁾ かれは授業内容にも注文を付ける。それは毎時間、題目を写し、式を立て、線を引くなど重複する作業や無益の計算に大半の時間を使うので、一時間当たりの練習問題数は平均して二〇題を出ることなく、応用

問題は五、六題に止まっていることである。さらに複雑な計算はできても、「井戸を掘り溝を開くときに泥土をどれだけ出さねばならないかを知らず、算術の題目に対しては常にその実際の用途を知らない」と批判する。³³かれは現実生活に役立つ算術教育をめざすが、授業時間の増加を求めているのではなく、授業の方法と内容を工夫することによって徹底して無駄を省き、効率的な指導をおこなうことを求めているのである。

単級での学習を前提とする小学校の算術授業においては、学習方法も常に工夫し、一グループを指導すると同時に他のグループには練習問題をさせることが欠かせない。³⁴兪子夷には、『一個鄉村小学教員日記』³⁵という単著がある。かれの言によれば、その記述は仮想のものであるが、大多数は根拠があり、記述内容は実見したか、経験したものである。³⁶この日記の中で、単級学校は同時に授業を始め、同時に終えなければならぬという。さらに「精巧な作業は短くすべき」「単調な作業は短くすべき」「難しい科目は朝の限以後にすべき」³⁷など児童の心理や集中力の持続に配慮した授業上の注意をおこなっており、教育経験者ならではの細やかな配慮が見られる。

こうした授業の有効性の判定には、児童一人ひとりの到達度の測定も必要である。兪子夷は、児童一人ひとりの学力に応じた進級を考え、弾力的な運用を図ることを考えているが、その際に知能と学力を評価する手段が必要であると述べている。³⁸それが測驗(テスト)法の導入につながった。兪は、一九一八年にソーンダイクの方法を参考にして『小学国文毛筆書法量表』を編んで、中国では最初の試験制度を作り上げた。³⁹かれは「標準テストを用いれば、このクラスの学生の中国における位置を明らかにできる。さらに知能検査を用いれば、各学生が算学に用いる努力がどのようなものか明らかにできる」として、教学指導の成果を客観的に評価する方法として測驗を重視したのである。⁴⁰この測驗運動は、一九二〇年代に入ってマッコールが来華したことで広く知られるようになった。⁴¹兪自身は「中華教育改進社は、アメリカのマッコールに中国でテストを作成して、学校調査を準備するように依頼した」と経過を述べ、マッコールが「学力効力」の公式を定めたが、それは「学校での毎年の学生一人当たりの平均費用をもって全学のテスト成績を割った平均効力数が、すなわち効力である」と規定している。⁴²これは「教育効力」と称してもよいことであるが、

愈にいわせれば、テストの目的の一つは教育効力を高めることであり、算術練習のテストを用いて過去の盲目的で児童の時間と精力を費やす練習を改めることができれば、教育効力を高める結果に繋がるのであった。⁴³

教育試験はやがて全国的に普及することになったが、その具体例を挙げると、愈子夷の『小学書法試験』など一三種別の国文科試験、愈子夷らの『初算術四則試験』など六種類の数学科試験、愈子夷の『小学社会自然試験』など七種類の社会自然試験、一種別の外国文試験、二種類の各科混合試験および個人と団体の智力試験などがあった。⁴⁴ここでは愈子夷の名前が中心を占めていて、かれが試験運動の牽引役となっていたことが分かるが、かれはこの試験をどのように活用していたのであろうか。それを窺わせる話が『一個郷村小学教員の日記』に見られる。国語では、第二学年で六五点以上は第四学年に進み、第四学年で六〇点に満たない者は第三学年に下りる。第一学年で年齢と知能が第三、四学年の組に入れる者は、たとえ六五点以上でも暫くは第三学年に入れる。⁴⁵ 仮想の話であるとはいえ、これは愈子夷の基本姿勢であると考えてよいであろう。この日記では、一人の教員が「四十人以上を教える単級学校では、クラス分けはかえって難しい問題」⁴⁶と記しているの、ある面では機械的ともいえるグループ分けは、やむを得ない選択ともいえるだろう。

愈子夷の試験方法に対する提言は、とくに算術の成績評価に特化する傾向があつたためか、伝統的な論文形式の成績評価に衝撃を与え、記憶力重視の試験制度にも批判の矢を放つことになった。⁴⁷ かれの発想には、プラグマティズムの影響が見られるが、かれが唱えたもので、世間で流布しているサイコロや骨牌を使って暗算を中心とする計算能力を向上させようとする試み⁴⁸などはその典型といえるだろう。また「国民学校に一年留級すれば、社会の平均で一人五元前後の経費を使う」と留級問題に言及した愈は「限りある経済をもって小学校を運営するのに、この学生が五元余計に使えば、別の一人の学生がこの五元の利益を受けられなくなる。実に一人が一年留級すれば、別の人の一年の権利を奪うことになる。留級する人が一千人となれば、全国で一千人が一年学ぶことが少なくなる」⁴⁹と述べて、限られた予算を可能な限り効率的に使うことを主張する。それは「少数の女学生のために、一クラスを独立して開くか女子

部を設けるのは、男女同校には及ばない⁵⁰⁾とする主張と同様に、プラグマティックな傾向の強さを示している。その他に「一つの教室を、毎日一〜二時間利用するだけであれば、その建設費がいかにかたくとも、すべて浪費である」といい、逆に「より精緻で美しい教室でも、朝早くから学びに使わせ、夜も学生に自修させれば、大いなる節約となる⁵¹⁾」と教育資源の最大限の活用を強調している。とはいえ、俞のこうした発言を表面的に受け取るとは、かれの本質的な理解には繋がらないであろう。「道德がなければ、われわれの民族は、すみやかに別の民族の統治を受けなければならない」と道德の重要性を語り、中国は「いまだ教育をもって立国の精神を養成できていない」「いまだよく全国の人民をして教育の価値を確信させていない」と教育の重要性を語る姿が、俞の本来の姿と考えられるからである。

二、五四時期以降の教育方法の導入と展開

設計教学法 (Project Method) は、アメリカの教育家キルパトリックが創始した教学法で、学生 (児童) が自発的に学習の目的と内容を設計・決定し、自らの責任で実行する単元活動であり、関連する知識や實際の問題を解決する能力を獲得することをめざしていた。それは班級を単位とする授業体制を取らず、学科の壁を打破し、教科書を無くし、学生 (児童) の学習動機を喚起する教師の任務を強調するものであった⁵²⁾。その中国での導入の目的は、書物の知識の重視、受け身の学習、分科教学の独立・分散などといった伝統的教学の欠点を克服することにあつたといわれている⁵³⁾。

俞子夷は、一九一八年夏に南京高等師範学校 (後の東南大学) 附属小学の主任に任命され、翌一九一九年夏、同校で設計教学法を試行し、その後八年間にわたって継続した⁵⁴⁾。「論著選」「前言」では、その実践は小学校低学年に対する「不徹底な」実験とされるが、俞は「設計の学習は学生が自ら学習するので、種々の用具や資料は各学生が便利に使用できるものでなければならない」といい、「供給」とは「モノをそこに置けばよいのではなく、学生に用法を理解させ、

学生に用いるときに時間を空費させないようにすべき」であるし、「字典」を用いるとき「調べ方を知らせなければならず」、「参考書」については「目録と索引等の調べ方を明らかにすべき」であり、「儀器」については「装備方法を知らせるべき」などと述べる。さらに「指導が無く、学生の成すにまかせるのは、設計教学法ではない。学生を強迫してやらせ、学生を指揮し、学生に命令するのまた設計教学法ではない。学生を導いて向上発展させるのが、真の設計教学法である」と定義している。⁵⁶一つの教室での活動については「作業の秩序は、時間を浪費しないこと」を基準とするが、全体の秩序を考えて、例えば「一団は木工をし、一団は実演をすると、声や音が衝突し、時間が不経済なだけでなく、精神もまた大変疲れる」⁵⁷ので、各グループの活動のバランスに対する配慮が重要となる。設計教学法の可能性や目的については、「生活上の実用があり、道徳上は公正で、知恵を増進でき、積極的な動作を生み出せる」可能性があり、目的については「伸縮性があるべき」⁵⁸で、その需要は「実際の生活から生み出される」べきであるとする。こうした俞の表現の中に、時間の浪費を避け、実用を重視しつつも、道徳的な公正さを求めようとする、上述のかれの言葉の一貫性が見えてくるのである。

俞子夷以外の教育関係者の設計教学法の理解は、どのようなものだったのか。例えば、知私の理解では「学校は社会で、教育は生活である」というデュイイの見解を基本とし、「設計教学法は、被動で、強制的なものではなく、自ら動いて努力するもの」であり、教師は「児童が自ら動いて多くの関係する材料を集め、努力して完全なる全体を組み上げる」とともに「傍らから児童が経済的ではなく、適切ではなく、完全でないところがあれば注意し、指導・改正・補足」することによって児童に興味を持たせる役割があるとす。さらにこの設計教学法は「一種の最も経済的な方法であり、最も効率的な方法」であると述べる。⁵⁹こうした設計教学法の理解は、俞子夷の理解と共通する部分が多い。その背景には、俞がアメリカ教育の視察を踏まえ、他に先んじて中国の実情に応じた実践に組み替える努力をし、普及にも努めたことがもたらした影響があると考えられる。⁶⁰

俞子夷は、キルパトリックの提起した四つの段階を目的・計画・実行・批判と表現し、各学科をその性質に照らし

て観察・遊戯・故事・運動・練習などの「系」に分ける「分系」設計法の教学を採用し、学科の性質が同じか類似しているものを混合科に組み込んだ。その組み合わせは、語言・文字・故事を一系に、史地・公民・社会常識などを一系に、自然・衛生・園芸・算術などを一系に、音楽・体育を一系に、美術・労作を一系にそれぞれ組み合わせ、児童にとって取り組みやすいものにした。⁶¹

一九二一年、全国教育会聯合会は「推行小学校設計教学法案」を成立させ、各省区の師範学校が設計教学法を研究するとともに、「師範附属小学と都市の規模がやや大きい小学は先行して実施し、模範とし、倣わせて、教学の良法を、次第に全国に広めんことをこい願う」と呼びかけた。こうしたことから小学校の設計教学法の試みは、上海・南京・蘇州から全国に広まっていった。設計教育法とも呼ばれたこの方法は流行してはいるが、少数ながらこの方法の意義・価値・根拠等々に関しては、一種の表面的な説明が見受けられるとの声があったし、各地の小学で試行されているが、設計の定義についての各人の表現の仕方が異なっているという声もあった。⁶⁴このように設計教学法についての共通理解は完全なものとはいえなかった。それでも王家鰲が一九二一年の夏休みに江蘇第二女子師範附属小学の暑期講習会に行つて俞子夷の設計教学法の話聞き、設計教学法は長所が多い、と感想を述べており、⁶⁵沈百英は江蘇第一師範附属小学での設計教学法の実施に当たつて、俞子夷を顧問として招聘している。⁶⁶こうしたことから中国における設計教学法の実践に対する俞子夷の影響力も相当大きかったことが判明する。

五四時期のデュイイの来華から一九二二年の「学校系統改革案」の成立の時期、アメリカ教育の影響は強まつており、「児童中心」「児童本位」の呼び声は日々高まりを見せていた。その中で設計教学法の実験に踏み切つた俞子夷は、科目の壁を打破し、授業時間を点数制に改める一方で、大枠では学期・学年毎の教学内容や到達目標をあらかじめ定めている。こうした方法が成果を上げたので、一九二〇年に二学級、二一年に四学級、二二年に七学級に増やし、二三年秋には全校に拡大した。⁶⁷かれは試行するクラス数を増やすとともに、教室環境の整備にも努力した。小学校の児童用の机と椅子は、子どもたちの姿勢や身体と密接な関係があるが、現状では条件を満たしていないことを指摘す

る。さらに一つの完備された試験学校ならば、少なくとも一万元の設備費を要するが、公立学校で最も切実なことは机と椅子の改造で、少なくとも一人当たり四円で衛生的な机と椅子が準備できると述べている。⁶⁶⁾これは俞の理想とする小学校の姿と現実と到達可能な目標を併記したものといえるが、ここに児童に対するかれの愛情と配慮を見いだすことができるだろう。

ドルトン・プランは、一九二〇年代にアメリカのヘレン・パーカー・カースト女史が生み出した教育指導法で、当初はドルトン実験室案 (Dalton Laboratory Plan) と呼ばれていた。中国での初めての本格的な紹介は、鮑徳徴の「道爾頓実験室計画」⁶⁷⁾と考えられるが、ここでは「設計教学法の根柢とする原理と差がない」としている。『教育雑誌』第一四卷第一号 (一九二二年一月) は、「道爾頓制専号」としてドルトン制に関する八本の論文が掲載されている。⁶⁸⁾その中心となったのは舒新城であり、私塾や年級制の学校の弊害が、この制度導入の背景にあることを指摘している。⁶⁹⁾また朱光潜は、ドルトン制と設計教学法の相違点について「ドルトン制の主旨は、個別の児童がその天資をはかり、興味に応じて自由に発育していくことにある。設計法の主旨は学校の授業と人生の実際の需要を聯絡し、児童をして人生の実際の需要に疑いを持たせ、しかるのちに再び目的を定め、自ら解決の方法を求めていく」とし、「目的を立てて實際生活の精神で学ぶのが設計法で、こうした条件はドルトン制の中で軽視されている」と二つの方法の主旨や目的の相違点を明らかにしている。⁷⁰⁾

ドルトン制の実施に関して、舒新城は「小学校では現在試験した人はいないが、……ドルトン制は大部分の困難を解決でき、ドルトン制の原理をとり、適宜の辦法を研究し、努力して試し」てほしいと希望し、「小学校でも国語ならドルトン制を採用できる」と述べている。ドルトン制に関しては、私塾・書院に似た生き生きとした教学方式という見方がある一方で、⁷¹⁾各個人の自由は完全なものとなるが、「社会化の精神はいささかも發展できない」と評されるように限界も見られるのである。俞子夷は「われわれは純粹のドルトン制を採用せず、分団を主とし、個別を輔とする混合辦法を用いたので、參觀者はわれわれにかわって「分団式のドルトン制」と命名した」と回想している。さらに俞

子夷の教学方針とドルトン制とを比較して、愈は子どもの發展を主体としたのに対して、ドルトン制は教材の修了を主体としたことと、愈が子どもを健全な社会分子に養成することを目標としたのに対して、ドルトン制は各人が多少なりとも一生役立つ知能を得させることを目標にしたとする。こうした違いがあるとはいへ、愈自身はドルトン制を全面否定したのではなく、この教学方法が自学を重視するのは、その優れた点であると考えていたのである。⁷⁸⁾

愈子夷は、設計教学法の試行と併行して、自学輔導・分団教授とドルトン制の長所を採り、小学高学年の児童は自学能力が高いので、ドルトン制を五、六学年に採用し、算術教授では学習過程で差が生まれるので分団教授法を導入して、教師の指導に都合のよいものとした。⁷⁹⁾愈自身は、パーカースト女史がドルトン制の下での学習は最も自由であると宣言しているけれども、児童は教材に対して絶対に選択の余地はなく、いわゆる自由はただ学習の日時と時間の長短に限定されていると批判的に見ている。ドルトン制は設計教学法に比べて寿命がやや短く、影響もやや小さかったが、その原因はドルトン制が伝統的な教育観を持つ人々にとって、急進的で新しすぎたためといわれている。⁸¹⁾またドルトン制の本格的採用には、環境整備の負担が大きすぎたことも普及を阻む大きな原因であった。ドルトン制の実施には、特殊な作業室が必要であり、学生（児童）が自由に使える各種の実験機器・図書・標本とそれを使いこなせる教員が必要であった。⁸²⁾むしろ設計教学法にも欠点があつて「作業中心の大単元教学」となり、その単元も常に互いに重複し、学生（児童）の知識をバラバラにしているか、学科を分ける設計式の各科教学法になつているかであり、結果として設備と教師の確保に苦しんだことなどがあげられている。⁸³⁾

設計教学法やドルトン制といった新教育方法に共通する弱点や欠陥としては、次のようなことが指摘されている。完全に学生（児童）の需要と願望から出発し、教師の作用を軽視し、教学の多くは偶然と願望より出て、放任に流れた。完全に学科の壁を打破し、教学内容を散漫で系統に欠けるものとし、学生（児童）の知識水準を低下させた。過度に直接経験を強調し、事々に学生（児童）自身に模索させ、教学課程自体の特殊性を抹殺し、無意味に時間と精力を費やした等々である。愈子夷は、算術教授をより効果的に進めるための教材の作成に細心の注意を払っており、教

材の編集者がともすれば「専門家の目から見て初歩で、易しいものとしているが、往々にして小学生の実際の能力より大変高い」ものとなっていることに注意せよと呼びかけ、⁸⁵「小学生の心理情況に照らして、材料を重ねて組むのは、教員の最も重要な工作である」と主張している。

上述したように、俞子夷がパーカースト女史を批判して「児童は教材に対して絶対に選択の余地は無く」としているのは、教材作成の重要性と教材選択に対する柔軟性を欠かせないものとしているためであろう。俞が「小学校の課業は、宿題をしないのが最も良い」と述べて、学校での学習に重きを置くとともに、綱要等の作成は「常に教員の指導の下」でと教員の指導を重視するのは、⁸⁷ドルトン制の本来の姿とは距離を置くだけの教育方針と考えてよいであろう。俞は学生（児童）の訓育に関しても、「多数の学生はただ自らの自由を知っているだけで、絶対に他人の福利を顧みない。常に他人を犠牲にして、自らを満足させる。だから小学校の自由教育には、大変問題がある。学生に自由の運用を教えることがなければ、規律・訓練が一種の裝飾となってしまうことを恐れる」と述べて、⁸⁸教員による指導を重視した。

「設計教学法は新しい教学方法であるが、啓発法・注入法を脱しきっているわけではない」とする評価があるように、⁸⁹算術教育に携わり続けた俞子夷の意識の中には、啓発主義・注入主義の要素が残っていて、それが教員の指導の重視につながっている可能性がある。俞は「教学の指導は、師範学校で自学輔導法や設計法を用いて師範生に教学法の實習を教えるようなものである。命令と注入は決して成功することはできない」と自らを戒めつつ、「ドルトン制は社会性に欠け、互助の機会が無く、優秀な学究式の学生には都合がよい」と批判しているように、ドルトン制の全面的な採用には踏み切れなかったのである。中国の鉄道駅で切符を買うときにきちんと整列できない状況をあげて、「学校の中で、もし秩序ある習慣を養成できれば、この種の弊病を救済できる」としているのは、自主的にルールを守る中国人を、教育的手段を通して育成しようとした俞の教育的姿勢を示している。俞は陶行知と自らを比較して「私を實際を語り、かれは理論を語った」と述べているように、あくまでも現状を直視し、より具体的な教育的手段を求め

たのである。より具体的な教育実践を求め続けたこともあって、一九一八年より一〇年近いかれの教育実践には全国から三万名近い教育関係者が参観に来たといわれている。⁹⁴⁾

おわりに

俞子夷は、五〇年にも及ぶ算術教育の実践者であり、その教育をより効果的にするためにさまざまな工夫をおこなった教育者であった。大学に学んだこともなく、正規の留学経験もなかった俞は、一九〇三年から翌年にかけての『蘇報』案に関係した日本亡命、一九〇九年の江蘇省教育会に選抜されての日本派遣を通して、日本の教育界で盛行していたヘルバルトの教育理論などを導入し、江蘇省立第一師範で試行した。辛亥革命後の一九一三年から翌年にかけて、江蘇都督府教育司の手でアメリカとヨーロッパに派遣され、教育現場への新教育導入の可能性を求めて精力的な教育視察をおこなった。かれは「教育救国」の立場で教育普及を図ったが、その努力を阻む壁となったのは、清末民国初期の中国教育界の劣悪な環境であった。経費も教員も欠乏する状況の中で、より多くの児童に適切な教育をおこなうにはどのような方法が良いのか。かれは伝統的な私塾での教育にも一定の意義を認めるなど、改革に関しては漸進的な一面を持っていたが、その一方で新たな教育方法を取り入れることについては積極的であった。かれが導入したヘルバルト理論とそれを発展させたラインの五段教育法の実験、さらに分団教授や自学輔導主義の採用は、単級学校を基本とする小規模な学校が多い中国教育界で、個々の児童に応じた多様な教育を、より多くの児童に施すための手段となった。

民国期に入って欧米の教育を視察した俞子夷は、プラグマティックな傾向を強め、教材の節減や「無益の計算」の排除などによる現実生活に役立つ算術教育の必要性を強調した。児童それぞれの到達度を測定する測驗法の積極的な採用も、効率的な教育の追求と繋がっている。児童のレベルや心理を考えた教材編輯や指導のあり方を説いているの

は、現場を最優先したかれの姿勢の反映であろう。設計教学法を導入するに当たっては、「分系」設計法にするなど独自の運用を図り、それぞれの場面における教員の指導を欠かせないものとした。啓発主義や注入主義の傾向が残っているのも、その現われである。教材面では柔軟な方針を打ち出したため、教材への対応という面で見解を異にしたドルトン制の本格的な採用には到らなかった。⁹⁶ 児童の道德的公正さの涵養は、国家の将来を担う人材に道德心が不可欠であるとするかれの願望を反映していると考えられる。このように一連の教育実験を見ると、俞子夷自身の教育観に基づく試行という側面が印象づけられるのである。清末から民国前期、ヘルバルト教育理論に象徴される日本の教育方法から設計教学法に象徴されるアメリカ的教育方法へと大きな転換が図られたように見られる。俞子夷自身はその代表者と受け止められているが、かれにとっては劣悪な教育環境の中で算術を中心とした教育をより効率的に進めるための新たな教育方法の導入であり、実践方法については段階を追い、必要に応じて変化、発展しているものであって、劇的な変化とはいえず、漸進的な発展と理解すべきである。

〔註〕

- (1) 田正平『留学生与中国教育近代化』（広東教育出版社、一九九六年、以下書名のみ示す）二五四頁。
- (2) 同前書、二四二頁。
- (3) 俞子夷『五十多年学習研究算術教法紀要』（董遠騫・施毓英編『俞子夷教育論著選』人民教育出版社、一九九一年、以下『論著選』と略す、四三五頁）。このとき俞子夷は、日本語を学び、中国人留学生に英語を教え、翻訳と校正で生計を立て、その後、黄宗仰の紹介で、中華学堂で教鞭を執った（董遠騫『俞子夷教育思想研究』遼寧教育出版社、一九九三年、以下書名のみ示す、二頁）。
- (4) 「俞子夷生平著作年表」『俞子夷教育思想研究』二〇八―二〇九頁。俞子夷は、理科が好きで、青墩小学では章程に違反することを承知の上で理科を追加したが、省視学はそれを合理的と認めた（俞「複式学級の常識教材」『教育雑誌』第二九卷第九号、一九三九年、『論著選』二七二頁）。かれはこのように伝統的な教育体制に安住せず、進取の精神で教育に取り組んでいた。

- (5) 俞「五十多年學習研究算術教法紀要」『論著選』四三六頁。ただし、一九二二年に俞が江蘇第一師範附屬小学で一年生に対して日本の教え方を導入したが、思うような結果を出すことはできなかった（俞子夷教育思想研究」六八頁）。
- (6) 「学部通行各省初級師範学堂加授單級教授法文」（朱有贖主編『中国近代学制史料』華東師範大学出版社、一九八九年、第二輯下冊、二二九頁）。
- (7) 「前言」『論著選』二頁。
- (8) ヨハン・フリードリヒ・ヘルバルトは四段階教授説を唱え、その弟子ラインは五段階教授説（予備―提示―比較―総括―応用）へと発展させ、日本でも流行した。中国では清末の段階で、張世杓「葉因氏之五段教授法」『教育雜誌』第二年第九期、一九〇九年、で紹介されている。
- (9) 周谷平『近代西方教育理論在中国的傳播』（広東教育出版社、一九九六年、以下書名のみ示す）七六頁。
- (10) 鄭朝熙「單級教授之要項」『教育雜誌』第五卷第九号、一九一三年。
- (11) 拙著「中国近代教育の普及と改革に関する研究」（汲古書院、二〇〇二年）二一―二二頁。
- (12) 『近代西方教育理論在中国的傳播』三六―三七頁。
- (13) 同前書、八六頁。ヘルバルト学派の教育理論は、科学知識の系統性と内在的論理関係を強調し、教室での教学課程をプロセス化したといわれる（『留学生与中国教育近代化』一三八頁）。
- (14) 『俞子夷教育思想研究』一六二頁。
- (15) 俞「小学実施道爾頓制的批評」『論著選』一四八頁。
- (16) 『留学生与中国教育近代化』二五一―二五二頁。
- (17) 俞「一筆教育上の旧賬」『論著選』一三〇頁。
- (18) 同前『論著選』二二二頁。
- (19) 例えば、一九〇九年の浙江省松陽県の一三校の初等小学堂に対する調査では、教員数は一校当たり平均三・五人、児童数は一校当

たり平均で三・二人となっていた(前掲拙著『中国近代教育の普及と改革に関する研究』二〇頁)。

- (20) 兪「現代我国小学教学法演變一斑」『論著選』四八四頁。
- (21) 兪「現今学校教育上急応研究之根本問題」『教育雜誌』第六卷第一二號、一九一四年(『論著選』には収録されず)。
- (22) 同前論文続編『教育雜誌』第七卷第三號、一九一五年(同じく『論著選』に収録されず)。
- (23) 天民「分团教授之實際」『教育雜誌』第六卷第一一號、一九一四年。
- (24) 天民「分团式動的教育法」『教育雜誌』第八卷第一號、一九一五年。
- (25) 楊祥慶「算術科之自学輔導法」『教育雜誌』第八卷第一〇號、一九一六年。
- (26) 「兪子夷生平和著作年表」『兪子夷教育思想研究』二〇九頁。
- (27) 吳洪成主編『中国小学教育史』(山西教育出版社、二〇〇六年、以下書名のみ示す)二二二頁。
- (28) 同前書、二二三頁。
- (29) 兪「算術教授之科学的研究」『教育雜誌』第九卷第三號、一九一七年(『論著選』には収録されず)。
- (30) 兪「算術教授之科学的研究(続)」『教育雜誌』第九卷第六號、一九一七年(『論著選』には収録されず)。
- (31) 兪「算術教授革新之研究」『教育雜誌』第一〇卷第一號、一九一八年、『論著選』一頁。
- (32) 同前、『論著選』三、四頁。
- (33) 同前、『論著選』五、六頁。
- (34) 兪「關於小学校算学教育の問題」『論著選』一三五頁。
- (35) 兪「一個鄉村小学教員の日記」(商務印書館、一九二七年)。
- (36) 兪「自序」同前書(上冊)、一頁。
- (37) 同前書(上冊)、一七頁。
- (38) 兪「關於全国教育會議決学制系統草案初等教育段の問題」『論著選』一四頁。

- (39) 『愈子夷教育思想研究』四八頁。ただし、当時は中国の教育・心理両学界の大きな注目を浴びることはなかった（『近代西方教育理論在中国的伝播』二四七頁）。
- (40) 愈「小学算学教学法概要」『教育雑誌』第一六卷第一号、一九二四年、『論著選』九五頁。
- (41) 『愈子夷教育思想研究』四一頁。
- (42) 愈「小学教育的効力」『論著選』九七頁。
- (43) 『愈子夷教育思想研究』九五頁。
- (44) 『近代西方教育理論在中国的伝播』二五二～二五三頁。
- (45) 前掲『一個鄉村小学教員的日記』（上冊）二八頁。
- (46) 同前書（上冊）、二六頁。
- (47) 『愈子夷教育思想研究』三七頁、四三頁。
- (48) 愈「五十多年學習研究算術教法紀要」『論著選』四四八頁。また前掲『一個鄉村小学教員的日記』（下冊）五頁では、こうした遊戲について、外では悪いことをしているとのデマが流れているが、牌の形式を改めて教具にしたことを語るべき、と述べている。
- (49) 愈「小学教学法上的新旧衝突」『教育雑誌』第一五卷第九号、一九三三年、『論著選』六九頁。
- (50) 愈「初等教育的新趨勢」『論著選』一一八頁。
- (51) 愈「小学教育的効力」『論著選』九八～九九頁。
- (52) 愈「道德教育的破産与小学教員的責任」『論著選』一四六頁。
- (53) 『近代西方教育理論在中国的伝播』二〇四頁。
- (54) 王猷玲主編『中国教育史』（鄭州大学出版社、二〇一一年）二六七頁。
- (55) 『留学生与中国教育近代化』二四四頁。なお『論著選』の「前言」では、愈は教育科教授に任命されたとする。
- (56) 愈「視察設計教學的標準」『教育雑誌』第一四卷第二号、一九三三年、『論著選』二二～三二頁。

- (57) 同前、『論著選』二二三頁。
- (58) 同前、『論著選』二五頁。
- (59) 知我「設計教學法的研究」『教育雜誌』第一三卷第七号、一九二二年。
- (60) 兪「讀了十二本設計教學法專書的書後」『教育雜誌』第一六卷第一〇号、一九二四年、『論著選』一二四頁、によれば、設計教學法に関する二二冊の本の書評の中で、一九二三年に出版された林本・朱兆華・李宗武共著の『設計教育大全』は日本書を転訳したもので、一読して大変失望したと書いている。この当時、中国では直接原本を訳すことができるので、転訳の必要がないし、日本語を経由しているので、用語などの使い方に問題があつて、読んでもまるで理解できない、と述べている。兪子夷がアメリカの理論を直接取り入れ、中国に適應するものに作りかえようとする思いが伝わってくるコメントである。
- (61) 『中国小学教育史』二四六頁。
- (62) 同前書、二四七頁。
- (63) 太玄「基爾巴脱利克論設計教學法」『教育雜誌』第一三卷第九号、一九二二年。
- (64) 劉孟晋「設計教學法概要」『教育雜誌』第一四卷第一〇号、一九二二年。
- (65) 王家鏊「我第一次試行「設計教學」的情形」『教育雜誌』第一三卷第一二号、一九二二年。
- (66) 沈百英「江蘇一師附小初年級設計教學的實施報告」『教育雜誌』第一四卷第一号、一九二二年。この試行結果報告は、沈百英「設計教學法試驗報告」『教育雜誌』第一四卷第六号、一九二二年、にある。なお沈百英は、兪子夷の教え子である（『近代西方教育理論在中国的傳播』二〇六頁）。
- (67) 『留學生与中国教育近代化』二四六～二四七頁。
- (68) 兪「小学校の三個問題」『教育雜誌』第一四卷第七号、一九二二年、『論著選』二七～二八頁。また前掲『一個鄉村小学教員的日記』（上冊）四一頁、では、「机と椅子は移動に便利なものであるべき」と述べている。
- (69) 鮑德徵「道爾頓實驗室計畫」『教育雜誌』第一四卷第六号、一九二二年。

- (70) 孫培青・李国鈞『中国教育思想史』(第三卷、華東師範大学出版社、一九九五年)二二二頁、によれば、一九二五年七月までに、全国の一〇〇余りの中小學でドルトン制という教學制度が試行され、報刊に發表された関連論文は約一五〇篇、関係する著作・訳書・試験報告などは一七冊に達した。
- (71) 舒新城「什麼是道爾頓制？」『教育雜誌』第一四卷第一一號、一九三二年。
- (72) 朱光潛「在「道爾頓制」中怎樣應用設計教學法？」『教育雜誌』第一四卷第二二號、一九三二年。
- (73) 舒新城「道爾頓制與小學教育」『教育雜誌』第一五卷第三號、一九二四年。
- (74) 舒新城「道爾頓制與小學國語教學法」『教育雜誌』第一六卷第一號、一九二四年。
- (75) 前掲『中国教育思想史』(第三卷)二二〇頁。俞子夷も「ドルトン編制は實に私塾・書院の精神の上に一つの系統を加える」と同様の見方をしている(俞「小學教法上的新旧衝突」『論著選』七二頁)。
- (76) 俞「小學實施道爾頓制的批評」『論著選』一五〇頁。
- (77) 俞「現代我國小學教學法演變一斑」『論著選』四九八頁。
- (78) 『俞子夷教育思想研究』一六三〜一六四頁。
- (79) 『留學生與中国教育近代化』二四七頁。
- (80) 俞「現代我國小學教學法演變一斑」『論著選』四九九頁。
- (81) 『近代西方教育理論在中国的傳播』二一六頁。
- (82) 王炳照・閻國華主編『中国教育思想通史』(第六卷)(湖南教育出版社、一九九四年)二二一頁。
- (83) 前掲『中国教育思想史』(第三卷)二〇九頁。
- (84) 前掲『中国教育思想通史』(第六卷)二二一頁。ほぼ同様の見解が、前掲『中国教育史』二六八頁、『近代西方教育理論在中国的傳播』二一八頁、に見られる。
- (85) 俞「小學實際問題―分数的初歩練習」『教育雜誌』第三〇卷第一號、一九四〇年、『論著選』二九二頁。

- (86) 俞「小学實際問題―網要的做法」『教育雜誌』第三〇卷第七号、一九四〇年、『論著選』三二〇頁。
- (87) 同前、『論著選』三二六頁。
- (88) 俞「幾個訓育方面的小問題」『論著選』四一頁。
- (89) 沈子善「設計教学法之真詮与其發達史」『教育雜誌』第一四卷第七号、一九三二年。
- (90) 俞「小学校長与教学指導」『論著選』一九二頁。
- (91) 俞「小学實施追爾頓制的批評」『論著選』一五一頁。
- (92) 俞「設計教学法」『論著選』四〇頁。
- (93) 俞「現代我国小学教学法演變一斑」『論著選』四八七頁。一方、陶行知は、教学做合一の方法と設計教学法とはたいへん近いが、往々にして「做（なす）」を忘れていと述べ、設計教学法は「做」の要素に欠けると考えていた（『近代西方教育理論在中国的傳播』一九六頁）。
- (94) 『留學生与中国教育近代化』二五四―二五五頁。
- (95) 『俞子夷教育思想研究』九六頁。俞子夷が「教育救国」的思想を持ち続けたことが、晩年の一九五七年、反右派闘争で批判される原因となった可能性がある。本書の著者である董遠騫は「かれの教育救国思想の如きは、主觀的願望は良い。かつかれは普及教育等々の工作のために有益な貢獻をした。しかし革命を経ることなく、單純に教育手段によって旧中国を改造しようと希望することは、結局のところ實際と違ふ幻想であり、旧知識分子の覚悟と認識の局限性を反映している」（同書、二〇〇頁）と述べ、戴逸の「序言」を忠実に踏襲した見解を表明している。しかし、こうした「教育救国論」批判は、今日では修正されつつあり、教育救国論の再評価が進んでいく可能性がある（拙稿「中国近代教育史における教育救国論」『歴史と地理』六四四、山川出版社、二〇一一年）。
- (96) 俞はウイネトカ・プランにも関心を示し、研究を進めた（俞「現代我国小学教学法演變一斑」『論著選』五〇〇頁）。